生々しくよみがえる悪夢

県民遺骨収集

岩陰に一団、また一団 息をのむ収骨団

2-1T
2.24→

【糸満・具志頭】一家とみられる五柱が、一カ所でうずくまるように発見された。大きな破片を頭っ腹に突き刺したままの姿で倒れ、あるいは手投げ弾を握ったままの遺骨が次々に発見された。二十三日、五千人近くの人たちを動員して糸満市、具志頭村の"地獄の戦場"跡でくり広げられた「県民遺骨収集」は、四百四十柱余の"野ざらし遺骨"を収集した。収骨団が、低木の林に入り、枯れ葉をかき分けると、水筒や飯ごうをしっかりと腰に巻きつけ、眠るようなかっこうで発見されるなど、遺骨の一柱一柱に四十一年前の"悪夢"がはっきりと残り、収骨団もしばし声を詰まらせた。



収骨ポイントでたばこや香を供え、合掌する参加者＝糸満市字上里

印鑑など遺品も続々

収骨団に最も悲惨な状況をみせつけたのは、十三区の字米須嶺の低木林だった。同所は、自然壕も多く、壕の中は毒ガス弾を撃ち込まれて一家全滅はもとより、多くの住民が犠牲になったところだ。そこで、岩陰に一団となって発見された五柱は、四柱が大人で、あきらかに一柱は子供の遺骨で一家五人がうずくまるように犠牲になったものとみられる。しかも、「照屋」と刻まれた印鑑やその他多数の遺品も発見されており、身元割り出しの手掛かりを残していた。

また、字大度と摩文仁の間

[illegible]らみて二十歳前後と思われる若い兵士が、眠ったまま息絶えたかっこうで発見されたが、この兵士は、水筒と飯ごうをしっかりと腰に巻きつけ、地下足袋をはいていた。認識票のものと思われる顔も首に巻きつけ、飯ごうのフタには、「吉田」という字もくっきりと残っていた。

この遺骨は、ほとんど完全な形で残り、きれいな歯並び、きちんとした身なりの割には、地下足袋といったアンバ

いは少年兵かも…」との声もあり、それだけに悲惨さを浮き彫りにした。

字大度と上里の間の海岸では、十柱前後の遺骨が、一団となって発見されたが、そのうちの一柱は、手投げ弾を握ったまま倒れていた。字小波蔵の山野では、腹と胸に破片を突き刺したままの遺骨もあり、四十一年前の悪夢をまざまざとみせつけた。

具志頭村の通称ギーザバンタ一帯でも、多数の遺骨がみつかり、学生服をまとったままの子供とみられる遺骨が、クシやハサミなどの日用品とともに発見された。ほかに住民の遺骨とわかるのも多数含



「もっと奥の方かね」―激戦地となった糸満市字真栄平の山中に入る婦人たち

北海道からも17人
9柱収骨 慰霊塔にまつる

北海道の遺骨収集団十七人も、ボランティアとして収骨作業に加わった。二月二十三日のこの日は北海道の慰霊祭の日。午前中、米須部落の後方の丘で作業に参加したあと、午後から北霊碑前で慰霊祭。祭壇の前には、収骨した遺骨も安置された。

札幌市遺族連合会青年部（西川真紹部長）が、二十三日の慰霊祭の前に沖縄本島での収骨作業を始めて今年で九回目。今回は慰霊祭の日に県民の遺骨収集があることを知り、全員で参加した。団長の西川さんは「今日も含め五日間で収骨した遺骨は九柱。年ごとに少なくなっていますが、山野に眠る遺骨が見つかる間は沖縄に来たいと思います」。

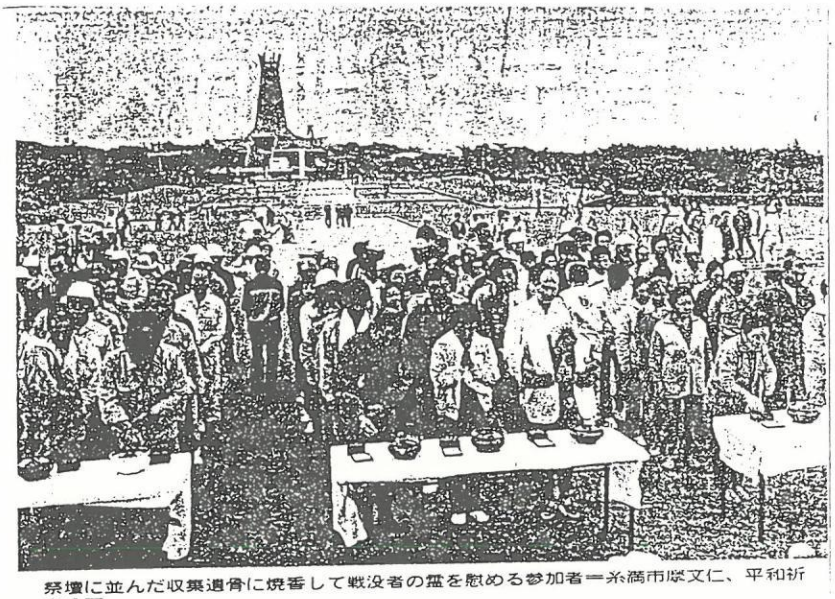
また、沖縄戦の生き残りで今回初めて遺骨収集に加わった北海道樺戸郡新十津川町の林孝太郎さん(六三)も「四十余年も気になっていた戦友の遺骨を収骨できました。まだまだ多くの遺骨が残っていると思う。一柱でも多く収骨してほしい」と語っていた。

親子で参加
戦争の恐ろしさを追体験

親子で参加した那覇市石嶺町二ノ二二、公務員・宮平良昭さん(四〇)と長男の昭成君（城北中二年）。摩文仁丘絶壁下の険しい海岸線を連れ立って収骨作業に従事した。「激しい戦いのあった現場を実際に体験させることで、息子に戦争の恐ろしさを少しでも知ってほしい」と良昭さん。自身も子供の記憶でしかない戦争体験。今なお、黒々と残る火炎放射器で焼かれた岩肌や砲弾痕にびっくりさせられたという。昭成君や一緒に参加した友達の田場寛典君（城北中一年）に当時の状況を説明しながらの作業。

昭成君も田場君もさすがに疲れた様子だったが、「あんな所を逃げ回ったなんて信じられない」「戦争って怖いなあと思いました」と話していた。

1986年(昭和61年)2月24日沖縄タイムス



祭壇に並んだ収集遺骨に焼香して戦没者の霊を慰める参加者＝糸満市摩文仁、平和祈念公園

県民遺骨収集

153柱を収骨

参加者の涙誘う自決跡も

いま一度県民の手で戦没者の遺骨を―と県が呼び掛けた第二回県民遺骨収集が二十二日、糸満市と具志頭村で行われ、西銘県知事をはじめ県内外の遺族やボランティアなど五千人余が参加、激戦地跡の雑木林や岩陰、自然壕から昨年同様おびただしい戦没者遺骨や遺品、不発弾がみつかった。収集された遺骨は同日午後四時の集計で百五十三柱、洗骨焼骨のあと三月下旬に糸満市摩文仁の国立沖縄戦没者墓苑に納骨される。（18、19面に関連記事と写真特集）

今回の県民遺骨収集は、昨年の収集でわずか一日で四百四十四柱を収骨した実績を踏まえ、国体を前に一柱でも多くの遺骨をと実施された。

作業は糸満市摩文仁の平和記念公園に現地実施本部を置き、糸満市六十二、具志頭村十三の計七十五班に分かれて午前十時から行われた。

今回も最大の激戦地だった糸満市の南部海岸を中心に、戦後四十二年近くも野ざらしのままの戦没者遺骨が相次いで発見された。サンゴ石灰岩の空隙（げき）を利用した避難壕からは自決跡とみられる集団の遺骨が出土、また大小の頭骨が並んだ家族の最期が掘り出され、参加者の涙を誘った。また水筒や弁当箱など布袋十五個分の遺品が集まった。終了後、解団式で嶺井副知事は「予想以上の収骨状況。今後も機会あるごとに収集に努めたい」とあいさつした。

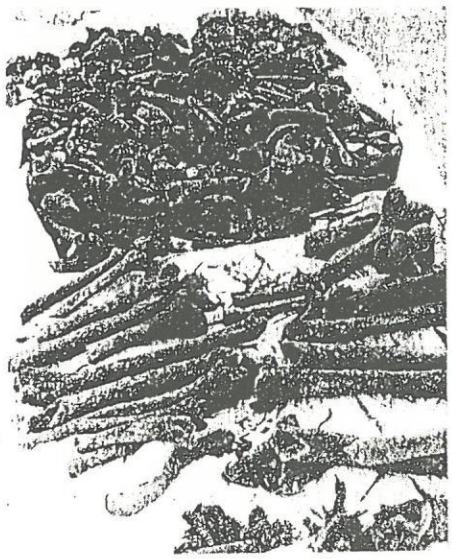
1987年（昭和62年）2月23日琉球新報

合わせて18柱収骨

那覇市首里のだるま寺壕
糸満市真栄平の自然壕

厚生省遺骨収集
せっけん箱、時計などの遺品も

厚生省沖縄戦没者遺骨収集団（富野実団長）による九〇年度遺骨収集で四日、糸満市真栄平の自然壕と、那覇市首里当蔵町のだるま寺壕で合わせて十八柱の遺骨が見つかった。本年度の作業では初めての収骨。二つの壕とも長年、手がつけられなかっただけに、今回の収骨で証言者たちは「生きている者として、やっと義務が果たせた」と語り、安堵の表情を浮かべていた。同日の作業ではこのほか、だるま寺壕から軍靴や水筒、懐中電灯など数多くの軍人関係遺品が発見されており、一帯で日米攻防戦が激しく展開されたことを裏付けた。



だるま寺壕で掘り出された4柱の遺骨＝那覇市首里当蔵

「義務果たせた」と証言者

だるま寺壕の発掘現場は、沖縄キリスト教短大の跡地で、入り口の道路に隣接した場所。地形の関係で壕の入り口からではなく、壕の真上から土を掘り起こす作業が行われた結果、地下約十㍍の地点で壕の坑道を確認し、間もなく遺骨などが掘り出された。この場所はこれまではキリスト教短大の校舎があったため手がつけられなかった。

遺骨は四柱で、中には数本の歯がついたままの下あごも。また遺品については、「十時五分」を指した腕時計やインクが残ったままの万年筆、「大尉」の階級章のほか、防毒マスク、バリカン、電線、日本刀など数多く見つかった。中にはせっけんが入ったせっけん箱も見つかり、セルロイド製容器の表面には「球　第一九五六四　増山智長」と刻まれていた。遺骨収集団は、早速厚生省に照会し、身元の確認を急いでいる。



「増山智長」名が刻まれたせっけん箱のフタ

同日の遺骨収集には沖縄戦当時、第六二師団石部隊工兵隊で初年兵だった伊良波長文さん（七一）＝糸満市大平＝も姿を見せ、収集団に壕の情報を提供していた。伊良波さんは「だるま寺壕はいくつも坑道があり、全体像ははっきりしないが、火薬類を保管していた工兵隊の二個小隊（約百人）がいた壕が爆発したのは間違いない。爆発では石部隊のほかの小隊も犠牲になったようで、合わせて約二百人が土中に埋まったようだ」と話した。

また、同日は糸満市真栄平にある南北の壕裏手の自然壕でも十四柱が見つかった。本年度の作業予定にはなかったものの、「取り残しがあった」という証言者の強い要望で、一九七六年以来の収骨となった。

1990年（平成2年）12月5日琉球新報

84柱 50年ぶりの鎮魂

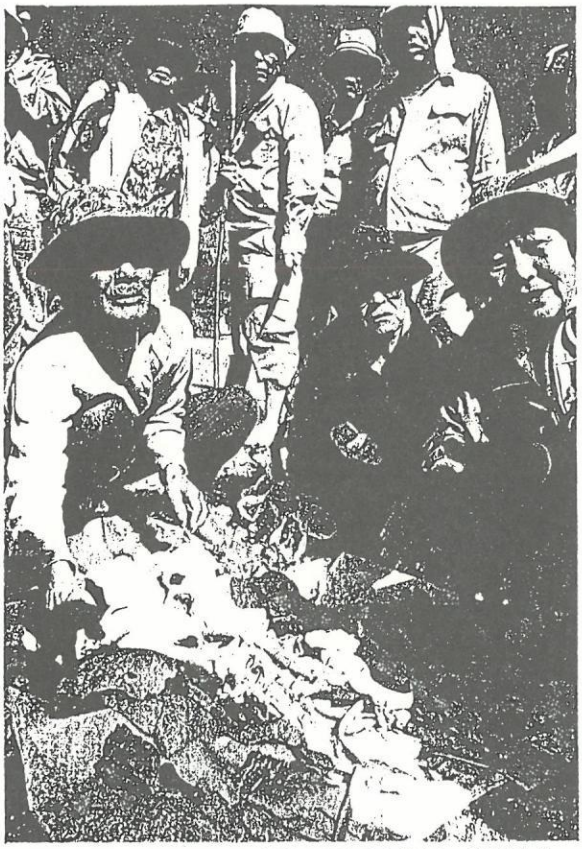
県民遺骨収集

6670人が山野で作業

県、今後も事業を継続

沖縄戦の終結から半世紀、人目にふれることなく山野に眠り続けていた遺骨を収集しようと、沖縄戦終結五十周年記念県民遺骨収集（県主催）が二十二日、糸満市など五市町村二十三地点で行われた。県外からの約三百四十人を含む六千六百七十六人が参加。八十四柱を収骨したほか、数多くの不発弾や遺留品を発見、収集した。収骨作業後は、摩文仁の平和祈念公園で慰霊祭をもち、参加者全員で戦争犠牲者の霊を慰めた。多数の県民が参加する大掛かりな遺骨収集は、一九八六、八七年に続き八年ぶり三回目。過去二回の参加者はいずれも五千人前後で、今回は過去最大の規模になった。

（20、21面に関連）



6600人の手で、84柱の遺骨が半世紀の眠りから覚めた＝糸満市上里

参加者は、午前九時半から平和祈念公園で行われた結団式のあと、六十七班に分かれて糸満市、具志頭村、玉城村、与那城町、名護市の二十三地点に入った。

うっそうと茂る木々。こけむす岩々。参加者は、木の根もとや岩陰で土をかき、岩をどけた。海岸線に遺骨がある！という情報に、がけを降りる人。遺骨らしきものを見つけるたびに作業の手を止めて目を凝らす人。水筒や軍靴、ボタン、ベルトなどの遺留品が出れば、あたりの土を懸命に掘る姿もあった。

収骨数は一回目の四百四十四柱、二回目の百五十四柱を下回った。

大田知事は「多くの県民の協力に感謝する。今後も遺骨収集事業を継続したい」と話した。一方で、人力による収骨に限界が見えつつあるため、「今年は戦後五十年という特別な年であり、機械力を投入した県独自の収骨事業ができないか検討したい」と述べた。

記者会見した吉元副知事は「地表部分の遺骨はおおむね収骨した。これほどの規模の収骨作業は一段落つけたい」と述べ、今後の収骨状況をみるという条件付きながら、県民遺骨収集は今回が最後になるとの見解を示した。

4. 沖縄戦被災者補償

（第3種郵便物認可）　第1015号

軍人遺家族の援護叫び

六年生も壇上で雄々しい誓い

全琉遺族会きのう結成

軍人軍属遺家族に対する日本政府の援護の手を是非沖縄にも差し延べて貰い度いと沖縄仏教会主催の全琉遺族会結成大会は十日午後二時から那覇劇場で臨時中央政府泉副主席、平良群島知事等を来ヒンに父や子弟を今次戦争に失つた遺族約五百名出席のうえ開会されたまず戦歿者の英霊への黙とう後、名嘉芳章氏座長席に就き❶会則審議可決❷大会宣言や日本政府吉田首相や比嘉主席宛の陳情文を朗読、会長に島袋全発氏副会長に大城鎌吉氏外顧問等の役員を決定し午後五時過ぎ嬉手苅踊同好会の歓迎演芸会で盛大な結成大会を終えた

この日定刻前から遠く本部町、受けられ、宣言を終つて日本政なにたくさんの人々が皆私と同知念村あたりからのお爺さんや府、中央政府への陳情文朗読に じような身であることを知つてお婆さん戦災未亡人等が乗込んだが何れも七年前に失つた吾が子や夫を思い出したかのような悲痛な表情であつた、出席会員も約三百名位に達し場内には斉しいたきりの父は未だ死んだとも思えません、どこかに生きているとさえ思います、でもこんなに立派な文化人になることを喜びます、どうぞお父さん、私達の将来を見守つて下さい」といじらしい

引続き最初に登壇した遺児代表城岳校六年生名嘉山喜哲君は「す、どうして私達の父さんは死んだでしょう、あの戦争が憎らしいが今日を機会に更に立派な私達兄弟を始めてそつと出せ悲しみ続けた私は恥しくなりま

決意披れきに全員涙ぐみ続いて起つた例イ軍人代表大宜味村出身の平良幸得さんは一段と声を張り上げ「南方戦線で両眼を失い

戦歿学生遺族も

日本政府へ陳情要旨

今次戦争で最大の戦災をうけた沖縄も終戦後七年遂次米国政府の批護のもとに復興の途につきつゝある、戦時中日本軍は住民に玉砕の決意を促し、護郷隊、防衛隊、動員隊などを組織せしめて戦線にかり出し、学生一般ともに犠牲者も多数に登つた、この人々も当然軍人、軍属と同様に遺族の援護について特別なるせん議で考慮して貰い度くこゝに全琉遺族会の発会式を期に一文を草して陳情する

琉球遺家族会

つた私には自分には見えないが亡き戦友に恥とうすることが出来て皆さんと同じく立ち出したい位です、皆さん、生活はくるしくとも一致団結して更生に努めましょう」と激励絶叫で会場は拍手もない位しんみりした風景に変つたかくて泉副主席や平良知事の激励の辞、大阪四天王寺管長、岐阜県遺族会長、大阪遺族連盟他各部面からの祝電十通の朗読披露が万場拍手裡に行わ

1952年（昭和27年）2月11日琉球新報

ひめゆり部隊や健児隊
有給軍属並みに取扱う
南連と厚生省の打合せで内定

【東京総局発】健児隊および姫百合部隊で代表される沖縄各種の全学徒隊いんの身分の処遇については長い間、関係庁代表者が集まり、協議を加えていたが、このほど南連と厚生省との打合せで、つぎのとおり内定した模様である、

男子学徒隊いんであつたものは軍人および有給軍属のとり扱いをうけて、女子学徒隊いんは、有給軍属のとり扱いを受けることになつた、また正式発表はされていないが、これが実施されることになると沖縄戦に参加した学徒で戦死、または負傷したものに対しては軍人軍属の援護金が適用されることになる、これに関連して、目下、十万枚にわたる調査表も、沖縄に送付されており近く具体的な事項も決定をみるはずであり、援護金が遺族のもとに届くのも近いものとみられる。